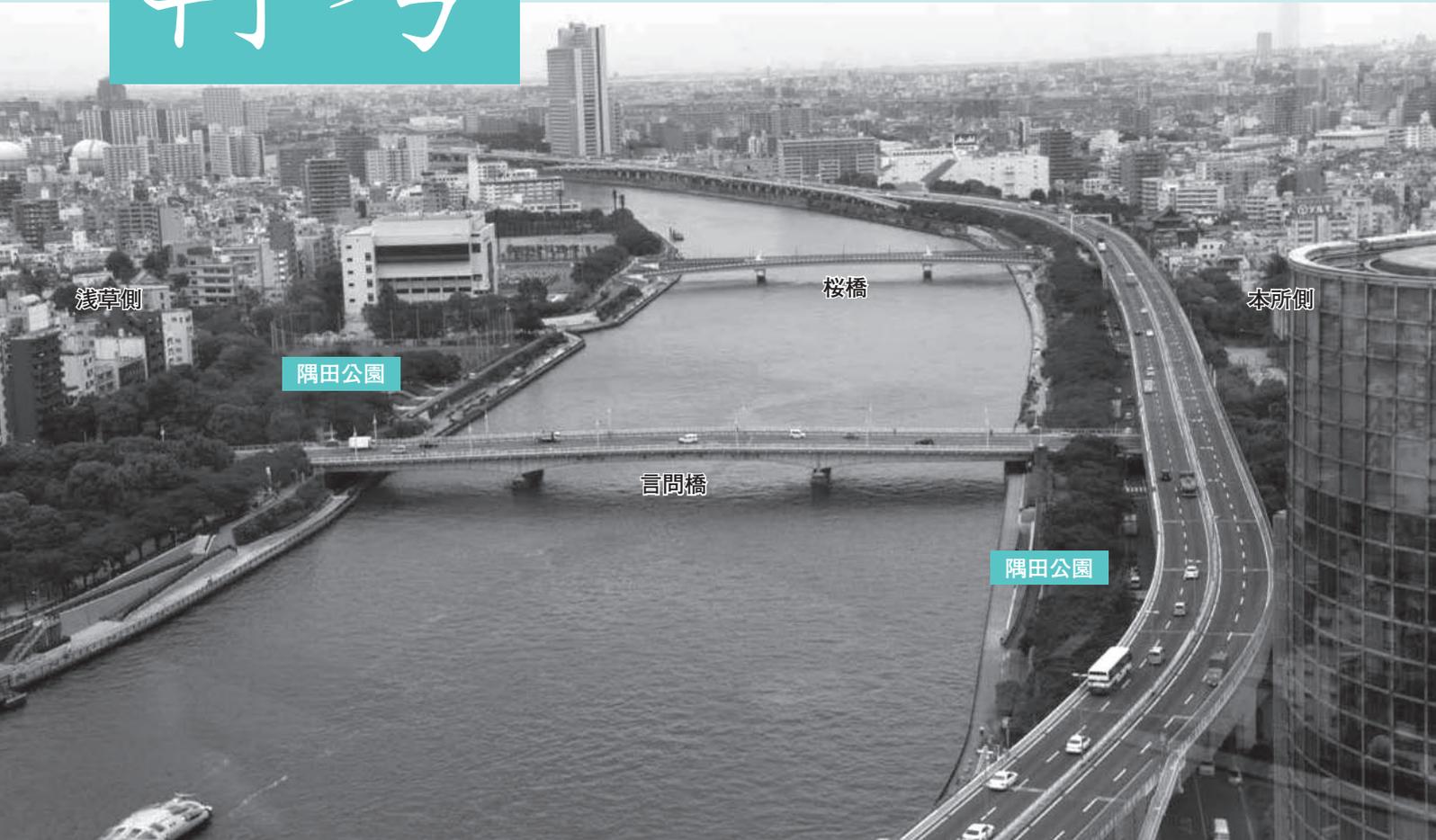


復興 再考

震災後に開設された 復興大小公園

1923（大正12）年9月1日、関東大震災が発生。
東京中で建造物が崩壊、街は火の手に包まれた。それから90年。
「帝都復興計画」で再建された橋梁や道路、公園などの社会基盤が
復興の記憶を現在に伝えている。



復興三大公園のひとつ、「隅田公園」。春には約700本の桜が満開になる。

憩いの場と防災拠点 複数の性格を持つ都市公園

関東大震災により、緑地やオープンスペースが防火帯や避難地として機能したことが評価され、公園が都市の重要なインフラであることが認識された。「帝都復興計画」では、東京の防災都市化を最大テーマとし、幹線道路の建設と並び、公園の確保に重点を置いた。そして、国の計画による三大公園（隅田公園、浜町公園、錦糸公園）と、東京市の計画による52の小公園が設置された。

三大公園は、欧米の公園設計技法等を取り入れ、それぞれに趣向を凝らしたつくりで、従来の東京には存在しなかった新しいタイプの公園となった。52の小公園は、地域コミュニティの中心にすべく、小学校に隣接して設置された。さらに、公園敷地と道路との境界のフェンスは低く設置することで、災害時には避難地として容易に逃げ込めるようにしている。小公園を小学校と隣接させ地域防災拠点とする考え方は、帝都復興計画で編み出されたものである。

この後、太平洋戦争の戦災復興事業により、全国に広がった。

関東大震災後には、三大公園や52の小公園の他にも、御料地や財閥からの寄付により、住吉庭園、旧安田庭園など、大規模な公園が各地に新設された。また、被服廠跡地は横網町公園として整備され、震災慰霊堂と震災記念館が建てられた。これらの公園は、大都会東京にあって緑あふれる憩いの空間として親しまれ、震災復興のシンボルにもなったほか、その後の災害時や戦時下には避難場所として機能した。この一連の公園整備により、東京の公園ストック量は飛躍的に向上し、さらに、日本における公園設計、施工の技術が飛躍的に進歩し確立することになった。

震災から90年、当時整備された公園は防災対策を充実しながら今もお、都民の憩いの場として親しまれている。

過去



昭和6年ごろの隅田公園の様子。上が浅草側、下が本所側。

隅田公園

現在



隅田川の両岸を挟み本所側と浅草側に広がる、日本初のリバーサイドパーク。吾妻橋から桜橋近くまで続く、南北に長い公園である。全長は1,300mに及ぶ。本所側は、約1万坪の旧徳川公爵邸を含む日本庭園。浅草側には、帝都名物ボートレース見学のための苑路が設けられた。日本の伝統的な風景と西欧近代の公園設計手法を取り入れて設計された、画期的な公園だった。

春になると多くの花見客でにぎわう。夏には隅田川花火大会が開催される。

◆基本データ◆

住所：(右岸)台東区浅草、花川戸
(左岸)墨田区向島
面積：18.9ha
完成：1928(昭和3)年

過去



芝生が広がる浜町公園。戦後に改修されてしまったが、今でも貴重な緑地スペースとなっている。

◆基本データ◆

住所：中央区日本橋浜町二丁目
面積：4.4ha
完成：1928（昭和3）年

都心のビジネス地区である日本橋につくられた公園。震災前、この地域には避難地となる十分な場所がなかったため、震災後に公園が新設された。一帯は、もともとは大名屋敷が建ち並ぶ武家地で、公園の場所にはかつて、肥後藩細川家の庭園があったという。開園当時は、芝生が一面に広がる緑豊かな公園だった。

現在でも、中央区で最も面積の大きい公園で、周辺住民や近くに勤めるオフィスワーカーに親しまれている。

浜町公園

現在



錦糸公園

過去



昭和6年の錦糸公園。芝生の中に大きなトラックが設けられていた。

旧陸軍糧秣廠（りょうまつしょう）跡地につくられた公園。本所・深川方面の工業地帯における、労働者とその家族の緑のオアシスとして計画された。芝生と花壇を主体とし、その中に一周200mのトラック、児童遊園などが設けられた。太平洋戦争で空襲を受けたが戦後に再整備された。

現在は、体育館や野球場、プールなどを備えた区立公園として多くの人に利用されている。

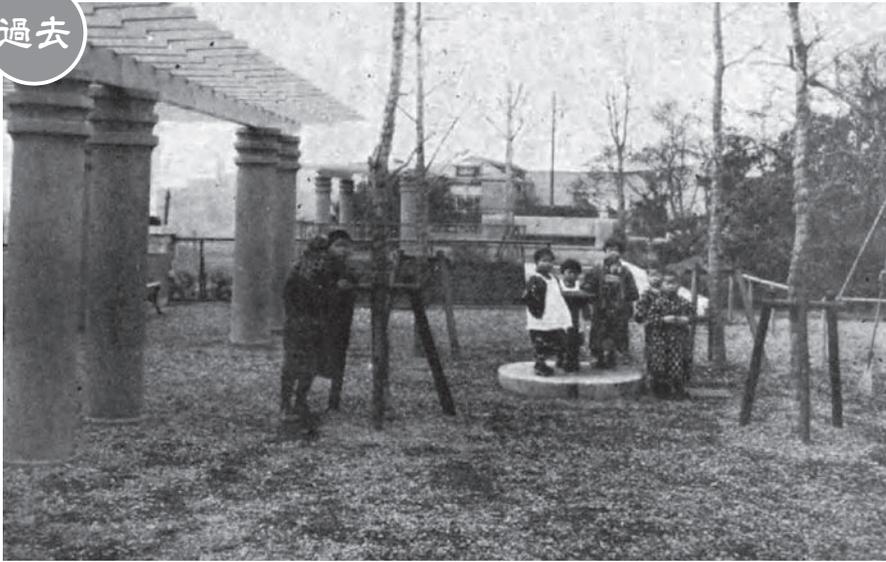
◆基本データ◆

住所：墨田区錦糸四丁目15番1号
面積：5.6ha
完成：1928（昭和3）年

現在



過去



完成当時の元町公園。左側に写る藤棚は、今も残されている。(提供：国立国会図書館)

◆基本データ◆

住所：文京区本郷一丁目1番
面積：3,520㎡
完成：1930（昭和5）年

52の小公園の一つ。他の小公園と同様に時代を経て姿を変えてしまっていたが、公園の歴史的価値が見直され、1982（昭和57）年、開園当時の姿に忠実に復元された。

モダンなデザインの擁壁や、古い円柱が印象的なパーゴラ、左右対称の二連式滑り台など、小公園の特徴的な様式が随所に見られ、当時の公園設計思想を現在に伝えている。

元町公園

現在

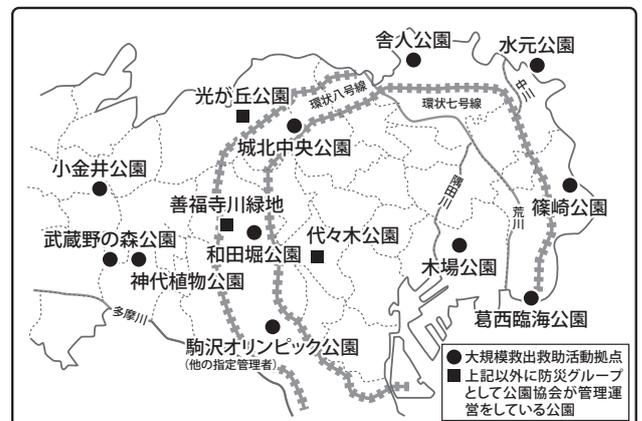


公園の未来

社会の変化に伴い、求められる多様なありかた

帝都復興事業以降、東京では、戦災復興時や東京オリンピック開催時などに、時代に合わせた公園整備が継続されてきた。公園は、防災機能や、良好な都市環境の形成、地域コミュニティの核となるなど、数多くの役割を持っている。少子高齢化の進行やライフスタイルの変化といった社会情勢の変化に伴い、多様化するニーズに合わせた公園整備が、今後ますます求められていく。

東京都では今後の公園整備について、水と緑のネットワークの形成を図るとともに、首都東京の防災機能強化を目指すとしている。そして、今後10年間のあいだに都立公園を170ha、うち防災公園を75ha開園するという目標を掲げている。防災公園には、災害対応トイレや太陽光発電を活用した照明施設、大型緊急車両の通行を想定した園路などが備えられている。災害時の「避難場所」や「活動拠点」として機能し、人命を守る貴重な場所として、整備が進められている。



大規模救出救助活動拠点及び基幹的広域防災拠点となる都立公園
(出典：東京都公園協会)

【参考文献】「後藤 新平」 越澤 明 著

【過去写真所載】特記以外は土木学会土木図書館